



モンゴル牧畜社会における銀製品
－その経済的な価値と文化的な価値

Silver Goods in Pastoral Society in Mongolia:
Their Economic Values and Cultural Meanings

風戸 真理 Mari Kazato

Kyoto Working Papers on Area Studies No.87
(G-COE Series 85)

February 2010

このグローバル COE ワーキングペーパーシリーズは、下記 G-COE ウェブサイトで閲覧する事が出来ます
(Japanese webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/staticpages/index.php/working_papers

(English webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/en/staticpages/index.php/working_papers_en

©2010

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

無断複写・複製・転載を禁ず

ISBN978-4-901668-73-6

論文の中で示された内容や意見は、著者個人のものであり、
東南アジア研究所の見解を示すものではありません。

このワーキングペーパーは、JSPS グローバル COE プログラム (E-4) :
生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点 の援助によって出版されたものです。

モンゴル牧畜社会における銀製品 —その経済的な価値と文化的な価値

風戸 真理

Kyoto Working Papers on Area Studies No.87
JSPS Global COE Program Series 85
In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa

March 2010

モンゴル牧畜社会における銀製品

－その経済的な価値と文化的な価値*

風戸真理**

Silver Goods in Pastoral Society in Mongolia:

Their Economic Values and Cultural Meanings**

Mari Kazato**

Livestock and land are the primary means of production in Mongolian pastoral society. Similarly, silver and silver goods play important roles in Mongolian society and economy. In fact, silver was used as currency until the socialist revolution at the beginning of the 20th century. This paper investigates the economic value and cultural meanings of silver goods by comparing the practices involving silver goods with those involving livestock in Mongolian pastoral society. The result is that silver goods support people to survive in crises such as collapse of herds by natural disaster, and that silver goods are esteemed highly as symbols of richness and spiritual harmony in cultural dimension of daily life.

<もくじ>

はじめに

1. 調査地と調査方法
2. 財の継承と所有関係
3. 銀製品の分類
4. 銀製品の超自然的な力
5. 価値の保存機能－銀製品と家畜の比較
6. 銀製品のメンテナンス－再成形・分割・統合
7. 家宝と商品－銀製品をめぐる価値の生成プロセス
8. おわりにかえて

はじめに

現代のモンゴル牧畜社会では、家畜とならび、銀塊と銀製品（以下、これらをあわせて「銀製品」とよぶ）に高い価値が認められ、利用、相続、交換されている。モンゴル語で銀を「ムング」（*m'ongo*）¹とよぶ。ムングは、現代モンゴル語で「お金」を表す一般的な語である。このことは、

*この論文は2006年12月4日に開催されたモンゴル研究会（東京外国語大学）等での発表に加筆したものである。

**京都大学地域研究統合情報センター・研究員。kazato@cias.kyoto-u.ac.jp

¹モンゴル語は慣例にしたがいラテン文字に転写して表記する。母音の前にアポストロフィーをつけることで、その母音が女性母音であることを示す。筆者の解釈による訳語または説明を〈 〉で、辞書（小沢 1983）に依拠した訳を《 》で示した。

モンゴルをはじめとする東アジア地域において、中世・近世をとおして銀が貨幣として用いられてきたことを背景としている（杉山 2003[1997]）。モンゴルでは歴史的にも、銀に高い経済的価値が認められてきたのである。本論文は、モンゴル牧畜社会において銀製品にどのような経済的な価値と文化的な価値が付与されているのかを、家畜と比較しながら明らかにすることを目的とする。方法としては、持ち主の性差に注目して、銀製品に対する権利・利用・流通のあり方について検討する。

モンゴル牧畜民の社会経済生活に関するこれまでの研究は、家畜（風戸 2006, 2009）と土地（風戸 2008, 2009；上村 2006）に、牧畜生産の基盤となる資源として高い価値が付与されていることを示してきた。モンゴルでは家畜の所有権は、核家族からなる世帯にある。世帯内では最年長の男性が世帯主として、家畜を所有し、管理する。土地に対する権利と管理のあり方もほぼ同様である²。牧畜社会を対象とした人類学的な研究は、牧畜社会の特徴として、父系出自の重視ないしは家父長制的な社会構造を指摘してきた（Barth 1964；佐藤 1991）。モンゴルについても、社会主義的な変革以前に調査した青木（1961）と後藤（1970）が、モンゴル社会の男性中心性を指摘している。

一方、銀製品は性別にかかわらず個人的に所有、利用される。女性も銀製品を個人的な財産として所有している。本論文の目的は、銀製品に注目し、銀製品の利用と権利のあり方を分析することを通して、モンゴル牧畜社会の多面的な理解を目指すことである。そのために、第一に、自然環境の面でも、20世紀初頭以降の国家のマクロな政治経済状況の面でも、きわめて不安定な環境のもとで生きる人びとにとっての銀製品の意味を検討する。第二に、とくに女性による銀製品の所有と利用のあり方を分析することを通して、これまで父系リネージが優先する社会として理解されてきたモンゴルの社会構造を見直す。

1. 調査地と調査方法

本論文のもとになるデータは主に、モンゴル国のアルハンガイ県チョロート郡（1997-1999年）、ドンドゴビ県デレン郡（1998年、2001-2003年）およびザブハン県テルメン郡（2003-2004年）³の牧畜地域で合計413日間のフィールドワークをおこなって得られたものである。調査地の地理的な概況としては、テルメン郡の面積は35万haで、約3000人が700世帯をなしている（2003年12月現在。テルメン郡役場作成統計資料より）。一方、デレンは面積93万haで、約2600人が600世帯をなしている（2000年12月。デレン郡役場作成統計資料より）。両郡ではほとんどの世帯が家畜を所有している。季節や年により変化するが、人口の大半が家畜管理に参加している。

自然環境については、両地域は年平均降水量が150～300mmの夏雨型乾燥地域で、牧草の育成期である夏が短く、冬は-40度に達するほどの寒さが特徴である。とりわけ、降水量と気温の経年変動の大きさが顕著である。このため、十数年に一度ずつ予期できない夏期の干ばつや冬期の豪雪や寒波に見舞われ、家畜の大量死が発生してきた。1999～2001年には二冬連続で「ゾド」（*zud*〈雪

² モンゴル国の土地法では、牧民の牧地に対する権利は「占有権」として認められている（風戸 2008）。

³ 調査時期は、アルハンガイ県チョロート郡では、1997年5-11月、1998年2-4月、1999年3-4月、ドンドゴビ県デレン郡では1998年7月、2001年6、8-10月、2002年9-10月、2003年9-10月、そしてザブハン県テルメン郡では2003年10月、2004年7-9月である。

冷害))が発生した。ゾドとは、例年に比べて極度の寒波と積雪のために家畜が採食できず、大量に弊死する自然災害である。このゾドにより、全国では家畜頭数の23%が失われた。デレン郡で調査をおこなった時期は、ゾドで家畜が失われた直後であり、収集されたデータにはゾドの影響がうかがえる。

次に社会環境についてであるが、自然環境と同様に不安定で予測できない変動を特徴とする。そのことを、現代史を紐解きながら具体的に示したい。モンゴル系の人びとは古くから、現在のロシア連邦南シベリア地域、モンゴル国、中国の内蒙古自治区に相当する広範な地域において、越境しながら遊動生活をしてきた。ところが20世紀初頭、彼らの遊動域は紛争と国家の再編を経験した。具体的には、ロシア革命とそれにともなう内戦、そして「外モンゴル」が清から独立し、露蒙中の国境が確定したことである。その結果、モンゴル系の牧民はいずれかの国家に包摂されることになった。

新生のモンゴル人民共和国では、1920年代から社会主義的な国家建設が始まった。とくに牧畜地域に大きな影響を与えた政策は、1950年代からの牧畜の集団化である。ひとつの郡が一つの牧畜協同組合をなし、組合単位の生産体制が確立された。ところが1990年代に再び国家体制が変わることになる。市場経済化・民主化への移行という名の大規模開発が牧民の生活を巻き込んでいった。社会主義的な牧畜協同組合は解体され、体制変化後の牧畜経営上の変化は、世帯、すなわち原則として夫婦と未婚の子どもたちからなる核家族が生産の単位となった。家畜の所有単位も組合から世帯に移ったのである。

2. 銀製品の継承と所有関係

銀製品がモンゴル牧畜社会のなかでどのように利用されているかを理解するため、まず個人の人生段階と銀製品の所有について検討する。モンゴルでは、若い男女は結婚とともに親の世帯を出て、新しい世帯をなす。牧畜地域では男女ともに結婚するまでの、主に十代後半に、成人として身体を飾るのにふさわしい銀製品を父母から分与される。厳密にいうと、父または母から、あるいはその両方から子に銀製品が贈与される。

モンゴルでは末子相続が社会的に制度化されている（青木 1955）。モンゴルの末子相続制は、最年少の男子が結婚する時には親の移動式天幕「ゲル」(ger)や仏具一式をもらい受け、老いた親はそこに同居するという理念である。ただしモンゴルの親子関係においては、親が子どもたちを区別して、特定の子を特別にかわいがる習慣がある。末子はその対象になりやすい。とはいえ、夫と妻のそれぞれに一人ずつお気に入りの子がいるので、特別扱いされるのは一人ではない。特別扱いされる子と親の性は一致する場合も交差する場合もある。夫と妻はそれぞれ自分のお気に入りの子に、自分の一番大切な銀製品を与える。他の子には、その他の銀製品を与えたり、新規に購入して与えたりする。

年長者から若年者へ銀製品が与えられるということはとりもなおさず、人は年齢を重ねる過程で銀製品を手放していくことを意味する。年長者は、銀製品のほか家畜、住居、家財道具をはじめとする持ち物を子や孫に贈与したり、またオイやメイなどの近親者に売却したりする。74歳の女性は、老いとともに自分の持ち物を子や孫に与えることは「死への準備」とであると語った。す

なわち、あらゆるモノを手放して、仏⁴に近づくのだという。男女ともに、仏に近づいた人びとは髪も剃る。モンゴルでは財は生前分与により相続されるのである。死んだ時に形見分けの対象となるのは衣類程度である。

次に、銀製品とならんで重要な財である家畜の所有について、ライフサイクルのなかに位置づけながら検討する。家畜の群れの分割と贈与は、子が結婚して世帯から分離する時、すなわち婚出を契機におこなわれる。女性、男性ともに婚出時には親から家畜を分与される。一般的に男性が女性よりも多くの家畜を与えられる傾向にあるが、実際には、家族構成や両親の考え方により多様である。ある牧民は、分与する家畜の分量を決める基準として、{その時点の家畜の総頭数÷(未婚の子の数+1)} であると言った。つまり、未婚の子が将来になす世帯の総数に、残される夫婦の世帯の分として「1」を加えて均分するというのである。バルトが南ペルシャの牧畜社会の調査にもとづいて、牧畜社会における家畜の生前相続のあり方とその機能について論じているが、その原理は上述の方法と共通している (BARTH 1964)。

モンゴルでは結婚以前に、子どもに親や親族が家畜を与えることがある。その機会のうちでもっとも制度化されたものは、男女ともに数え年の3歳を過ぎた頃におこなわれる「ウス・アワフ」(‘us avakh (生まれてはじめて) 髪を切る)) という人生儀礼である。両親が祝宴を開き、招かれたオジやオバは子どもの髪を切るとともに(写真1)、「白いヒツジをあげる」などと声に出して子どもに約束する。数カ月以内に1頭のヒツジが子どもの世帯の群れに移籍される。

その他に、日常生活のなかで親が子に家畜の個体を与えることがある(風戸 2006)。これは子に対する愛情表現としてなされる。このような婚前の家畜贈与は個体単位の贈与である。そして、これらの個体は、婚出時に分与される群れにかならずしも含まれない。それは、子どもの結婚までに家畜が死亡したり、食用利用されたり、その子のものであることそのものが忘れられたりするからであるという。

次に財の所有と管理のあり方について、銀製品と家畜を比較しながら検討する。家畜は文化的にもフォーマルな制度の面からも、男性の領域に属する財であるといえる。新郎と新婦が持ち寄った家畜は、行政登録の上でも、ローカルな地域社会に共通する認識の上でも、世帯主である夫のものとみなされる。実際、夫が管理し、原則として夫が処分を執行する。家畜は男性世帯主が代表として所有・管理する、世帯員全員の集合的な財なのである。

これに対して銀製品の所有は私的である。夫は妻がどのような銀製品をもっているか知らないし、妻は夫の銀製品について知らないことがある。自分の銀製品をいつ、誰に贈与、売却するか、という処分権も所有者にある。銀製品は、個人単位で所有・管理・処分されるのである。

3. 銀製品の分類

これまで銀製品と総称してきたものの種類と特徴を、利用者の性に注目して整理したい。現在利用されている銀製品には大きく分けて、馬具、装身具、茶碗の装飾(写真2)、喫煙具、携行用小刀の鞘の装飾がある。馬具(写真3)、とくに鞍については既婚であれば男女とも自分自身のものを所有している。これは婚出するまでに親から与えられる。馬具以外は、性別により所有する

⁴モンゴルではチベット仏教が広く普及している。

銀製品の種類が異なる。

まず女性用の装身具について述べる。女性用装身具の特徴は、小型のことが多い。女性用の小型装身具、すなわち耳飾り（*eemeg*）、腕輪（*buguivch*）と指輪（*b'ogj*）は日常的に身につけられる（写真4）。そのため変形や摩耗にさらされる（写真5）。そして頻繁に成形し直される。再成形の目的には、変形・摩耗した銀製品をきれいにすること、気分転換のためのデザイン変更、相続のために一つの装身具を分割して複数の娘のために装身具を作って与えるため、などがある。

一方、女性用装身具のなかにも比較的大きめで、その歴史的な価値が重視されるものがある。現在も使われるものとして様々な種類の髪留めがある。髪留めは着装する身体部位の特性もあって、腕輪や指輪と比べて消耗の程度が低く、昔のものが残りやすい。また、モンゴルでは女性は髪を伸ばすことが期待されている。このため装身具のなかで髪飾りは重要である。

モンゴルでは女性は髪を伸ばし、それを束ねるのが美的かつ規律正しい姿とされている。社会主義期のモンゴルでは、10年生までの学校教育においては女子生徒が短髪にすることは禁じられていたと女性たちはいう。伝統的には、未婚女性は髪を一本の三つ編みにし、結婚を機に髪型を変えて2つ分けにするという習慣があった。今日では、白髪の増えた年長者は2つ分けの髪を三つ編みにし、三つ編み束を耳の後ろあたりにヘアピンで巻き留めたり、ヘアバンドのように頭全体に巻き付けたりしている。中年女性は一本に束ねた太い三つ編みを折りたたみ、パレットなど大きめの髪留めで後頭部に留めつけることが多い。中年女性の髪型は、年長者の髪型よりも手早くつくることができ、働き盛りの時期の活動性の高い生活のなかで便利である。若い女性は短髪やおろしたままの髪を含めて、髪型のバリエーションが高い。中年女性がよく使う後頭部に髪束を留めつける髪留めは「ダラルト」（*daraIt* 《圧迫、文鎮》）や「ハプチャール」（*khavchaar* 《締める道具、一種の女性用ヘアーピン》）とよばれる。ダラルトは、幅約6cmの横長楕円形の銀の台に真珠や珊瑚、トルコ石が飾られ、裏に留め具がついたものである。

ほかに、20世紀前半頃まで使われていた「ハプチク」（*khavchig*）（Dorjgotov, Songino 1998）（ハプチャールともいう）という髪留めがある。かつてのモンゴルには貴族と総称される特別な社会・経済階層があり、貴族の既婚女性は2つ分けにした髪を帯状に伸ばし固めてたくさんのハプチクを飾った。ハプチクは2cm×10cm程度の銀の板2枚に蝶番と留め具がついた板状の髪飾りである。これは社会主義期の階級闘争の過程で没収されたということで、実物は博物館でしか見たことがない。

ここで、銀の髪留めの使用と意味づけのあり方を事例で示したい。

[事例1]

（ザブハン県テルメン郡にて）

Os（50歳、女性）⁵は祝宴で、亡き母から贈与された「ダラルト」をつけた（写真6）。細工のほどこされた銀の台に大きなサンゴが埋め込まれている。彼女は言う。「私はこれを決して売らない。これは私の母方の先祖から何世代も受け継がれてきたものだから。」

女性用の大型の銀製品は日常的には着用されず、タンスのなかに大切に保管されている。そし

⁵ 人名は仮名とし、男性の仮名は大文字2字、女性の仮名は大文字と小文字で表す。年齢は各調査地での調査開始時の満年齢を記す。

て儀礼的な場面でのみ身につけて人びとの目にさらされる。こうして摩耗や変形は最小限に抑えられ、基本的に再成形されない。

次に男性用の装身具を紹介する。男性の銀製品の筆頭にあげられるのがモンゴル語で「ヘト・ホトカ」(*khet khutga* 〈火打ち鉄・小刀〉)とセットにしてよばれる、火付け具と携行用小刀の鞘が銀の鎖でつながったものである(写真7)。ヘト(火打ち鉄)の持ち手部分には銀装飾がついている。ヘトとホトカ(小刀)を繋ぐ銀鎖には、小皿型の部品が付属している。これは火口を打ち付けてタバコの燃え滓を出す受け皿である。ヘト・ホトカは銀製品のなかでは比較的大型である。また原則として鋳直し、分割はされない。相続にさいしては息子のうち一人が選ばれて与えられる。

ヘト・ホトカとともに男性が身につける銀製品として、すでに触れた喫煙具一式がある。喫煙具一式の内容は、「ガンス」(*gans* 《中国語の桿子より》)とよばれるキセル、キセル内部を掃除する棒(*gansny soyoo*)、銀製の装飾板のついたタバコ袋、燃え滓の受け皿等である(写真8)。タバコ袋には刻みタバコ、火打ち石、点火補助用の乾燥植物等が収納されている。良質の喫煙具は、キセルの吸い口と火皿、掃除用の棒が銀製である。喫煙具一式はかつては実用品であった。しかし、巻きタバコ、マッチ、ライターが普及した今日、キセルで喫煙する者は少なくなり、とくにヘト(火打ち鉄)と火打ち石で点火するのは一部の年長者のみになった。それでも儀礼、とくにモンゴル暦(陰暦)の新年の祝いの時期は、男性はヘト・ホトカとキセルを腰帯にさげる(写真9)。喫煙にキセルを用いない若者も、ヘト・ホトカ等を装身具として利用するのである。ヘト・ホトカをはじめとする大型の男性用装身具は儀礼的な利用と意味づけが強いといえる。

その他の銀製の男性用装身具には、民族衣装のボタン(*tovch*)、ベルト(*b'us*)、指輪(*b'ogj*)等がある。モンゴルの民族衣装デール(*deel*)は男女ともに7つのボタンで留める仕様であるが、男性用デールのボタンは装飾性が高く、直径約1.5cmの銀の玉や透かし玉等が使われる(写真9)。腰には、日常的には幅約80cm、長さ8mの「絹布」(現在では化繊)を帯(*b'us*)として巻き、正装やおしゃれ用として、牛革に銀のバックルと装飾部品のついたベルトが用いられる。指輪は、女性用と比べて太く厚みのあるリングにモンゴルの伝統的な文様や仏教関係の意匠の飾りがついている。銀の台に石が留めつけられたものもある。

4. 銀製品の超自然的な力

装身具や道具類の装飾に用いられる金属には、銀の他に、金、銅、真鍮、それらの合金等がある。しかし銀製品には特別な価値が付与されている。その理由を人びとにたずねると、銀の色が「白い」(*tsagaan*)こと、白はチベット仏教の思想で清浄とされる色であること、の2点をいつも説かれる。逆に、白い色の清廉さを強調する時に、「銀の白」(*m'ongon tsagaan*)という語を用いて、白という色は銀のように混じりけなく清らかだ、と説明されることもある。銀は文化的な清浄さを象徴するモノなのである。

さらにいえば、銀製品はモンゴル人にとって個人の命運を左右するようなモノでもある。そもそも、銀をはじめとする貴金属を身につけることは宗教的な意味のある行為である。そのことを事例によって示す。

[事例 2]

Ots (32歳、女性)は首都で生まれ育ち、2005年4月以来2009年2月現在まで日本に留学中のインテリ女性である。彼女によると、「ある日、母が小指に新しく指輪をしていたので、どうしたのかとたずねた。すると母は、僧侶から健康のためにそうするよう指示された、と言った」という。

モンゴルでは都市でも地方でも、心身の不調のさいに近代的医療機関のほかに、チベット仏教の寺院や特別な力をもつと考えられている個人宅をたずねて治療や助言を乞う。そこで銀製品をはじめとする貴金属の身に付け方が指導される。たとえば広く普及している民間医療知識として、女性のリウマチや神経痛には銅製品すなわち銅の腕輪や指輪が効くとされる。

ある鍛冶師によれば、金はエネルギーを高め、放出する力をもつ。これに対して銀は、「現状維持、安定、鎮静をもたらす」とされる。「現状維持、安定、鎮静をもたらす」ということを説明する時、「トクトモル」(*togtomol* 《形容詞。安定した》)や「トクトーフ」(*togtookh* 《動詞。定める、樹立する、決定する、留める、暗記する》)という語が用いられた。実は、「トクトーフ」は家畜の日帰り放牧において理想的な状態であるとされ(風戸 2006)、モンゴルではあらゆる領域において高い価値の付与された概念である。

以上からいえるのは、貴金属一般に超自然的な力を認め、これを身につけることが健康や運命に影響すると考えられているということである。とりわけ銀は、身体および身の回りの環境に平安をもたらすものとして、高い価値がみとめられている。このため、モンゴルの人々は経済力にかかわらず、銀、金、銅など多様な金属を取り混ぜて、バランスをとりながらこれらを身につけている。

5. 価値の保存機能-銀製品と家畜の比較

次に、銀製品の財としての機能について、家畜と比較しながら検討する。まず事例2に、牧民の視点による家畜と銀製品の対比のあり方を示す。

[事例 3]

(ドンドゴビ県デレン郡の2人の牧民の会話より)

2000年の秋、DD (76歳、男性)は家畜と交換で銀の装飾付きの鞍を入手した。三男が30歳を過ぎても結婚しないので、まずは成人男性には不可欠な鞍をもたせてやろうと考えてのことだった。同時期に、BB (42歳、男性)も銀装飾の鞍をはじめとする馬具一式を購入した(写真10)。

その後この地域はゾドに襲われた。多くの家畜が失われたが、馬具は残った。2人はそのことを喜び合った。その時、彼らは銀製品や自動車などの家畜以外の貴重財を「ウヘフグイ・フルング」(*'ukhekhgui kh'orong*o 《死なない・財》)と表現した。

ウヘフグイ・フルングという言葉は何を意味するのだろうか。「ウヘフグイ」はモンゴル語の動詞「死ぬ」(*'ukhekh*)に否定の接尾辞「-*ugui*」がついたもので、「死なない」を意味する。次に

「フルング」である。牧畜生活のなかでこの語がもっとも重要な意味をもつのは、初夏、その年のはじめにヨーグルトを作り始めるさいに不可欠なタネを指す場合である。ヨーグルトの加工は季節的で、毎年初夏に始まり、秋に乳生産量が少なくなると終了する。秋、最後のヨーグルトから約500ccを取り分け、乾燥させて保存する。これがフルングで、乳酸発酵を促す菌類が含まれる。一方、フルングは経済学用語としても用いられ、「資本」、「財産」を意味する。事例の牧民の言葉に戻ろう。彼らが「死なない財」という言葉を用いて示唆したことは、銀製品は家畜とは違って、自然環境の変動に影響されずに価値を保存できるのだということである。しかし、ただ保存するだけではない。彼らは銀装飾された鞍を他の牧民らから買ったのである。彼らは、銀製品を家畜や現金をはじめとする他のモノを入手するための交換手段として利用できることを知っている。いつかまた、モノ、お金、サービスといった何かが必要となったとき、それを得るための「資本」になるという意味で、銀製品はフルングなのである。

「ウヘフグイ・フルング」には他にどのようなものがあるだろうか。「ウヘフグイ・フルング」のローカルな認識の外延について、次の事例から理解したい。

[事例 4]

(ザブハン県テルメン郡にて)

Ud (32歳、女性) に「あなたのウヘフグイ・フルングは何か」と私はたずねた。Udは答えた。「私が結婚した時に両親がくれた銀の装飾付きの鞍。服地、とくに絹の。そしてホンダの自家発電機とテレビ・チューナー・衛星アンテナのセット。これが私のウヘフグイ・フルング。これらは自分自身が乱暴に扱ったり不注意をしなければ、死ぬことも、盗まれることもない。」

「死なないフルング」として挙げられたのは、自身の持参財であった銀の装飾付きの鞍をはじめとして、結婚後のさまざまな儀礼の機会に贈与された民族衣装を縫うための生地、そして1990年代後半以降に牧畜地域で普及し始めた新しいモノである電化製品である。彼女の言葉は、家畜が生き物であるゆえに自然の脅威に弱いことや、毎日広い草地に放たれているために盗難に遭いやすいことを暗示している。それに対して上述の諸物が貯蓄財として優れていることを指摘した。ただし、電化製品は社会に新しく入ってきたモノであるために、耐久年数がわからないという不確実性がつきまとう。これに対して銀製品については、誰でもその耐久性を知っている。

6. 銀製品のメンテナンス-再成形・分割・統合

銀製品の再成形について前章で言及したが、銀製品の分割、統合、再形成をはじめとする金属の鍛冶や鑄造に従事する職能者はモンゴル語で「ダルハン」(*darkhan*) とよばれる。ダルハンは大きく分けて、鉄の鍛造を専門とする者と、金・銀・銅・真鍮を材料として鍛造・鑄造・彫金をおこなう者がいる⁶。

ダルハンは牧畜地域を巡回し、戸別訪問して貴金属製品の再成形を請け負う。銀製品は、再成

⁶ 金属加工技術者のなかでも、比較的容易な溶接技術の範囲で金属加工をおこなう者は、ダルハンとは区別して「ガグノールチ」(*gagnuurch*) とよばれる。

形の過程で分割や統合される。とくに女性用の小型装身具は複数の娘に分与するために分割される。具体例を示す。

[事例 5]

(ザブハン県テルメン郡にて)

Osはいくつかの銀の装身具をもっていた。母親から相続したものである。彼女は、「娘が5人いるので、これらの装身具を再形成するつもりだ」と言った。

親から譲られた銀製品はそのまま使われるだけでなく、分割されることがあるのである。複数の銀製品が統合されることもある。女性たちは若い頃から少しずつ、母や祖母など複数の親族から銀製品をもらい受ける。彼女たちは相続した銀製品を分割、統合し、好みのデザインにつくり変えながら利用する (写真11)。

銀製品は、デザインの変更にとどまらず、その用途も転換される。その例を示す。

[事例 6]

(ザブハン県テルメン郡にて)

BK (40歳、男性) は銀の飾りと銀の縁取りのほどこされた鞍を持っていた (写真12)。鞍を毎日使ううちに縁飾りの銀テープが剥がれてきたので、彼はそれをなくさないように剥ぎ取って、丸めてタンスにしまっておいた。

ある日ダルハンがバイクでやってきた。BKはダルハンを家に招き、もとは鞍の縁飾りであった銀塊を、7つ1組の民族衣装用ボタンに作りかえるよう依頼した。BKは、ダルハンが持ってきた鑄型会社⁷発行の銀製品注文製作用のカラーカタログを見て、好みのデザインのボタンを選んだ。ダルハンがBKの銀塊をデジタル量りで量った。BKの銀塊は、カタログに記載された必要銀量に足りなかった。BKは、娘 (7歳) の指輪に目をつけた。娘に、「もっときれいなデザインの指輪に変えてあげるから」と言って彼女の指輪の一部をボタンの材料として供与するよう言ういくるめた。娘は指輪をはずして差し出した。ダルハンはいくらの銀を合わせて溶かし、鑄型に流し入れて7つのボタンを作った (写真13)。

ボタン・セットの完成後、ダルハンが残った銀の重量を量った。その量で作れる指輪を、娘はカタログから選ぶことになった。娘はハートなどのついたデザインを選んだが、BKは写真の下に記載された必要な銀の量を見てはすべて断った。そして、「これがいい」と少量の銀で作れる飾り気のない指輪を選び、言葉巧みになかば強制的に娘に「はい」と言わせた。できあがった指輪は、彼女が数時間前までつけていた指輪よりずっと小さくて地味だった (写真13)。彼女はぴかぴかの指輪を泣き顔で受け取った。

ダルハンがBK宅に逗留して寝食しながら、近隣の人びとの依頼も受けて数日間にわたり鍛冶仕事をおこなった (写真14)。

銀製品が疲労、摩耗すると、ひとところに集めておき、ダルハンが来るまで保存される。そし

⁷鑄型の箱に、会社名「蒙特 Mentee」、所在地は中国内蒙古自治区、と書かれている。Mentee はキリル文字であり、モンゴル国への輸出用であることがわかる。

て手持ちの量の銀で何ができるかをダルハンと相談しながら、銀製品を再形成する。

銀製品の再成形についてまとめたい。まず、小型の銀製品は子どもの数に合わせて分割、統合されて相続される。これに対して大型の銀製品はめったに再形成されず、相続にさいしても分割されない。ただし銀の物質的特徴として、強い展性と酸化に対する弱さがある。このため頻度は低くとも大部分の銀製品がいつかは再形成される可能性がある。

7. 家宝と商品-銀製品をめぐる価値の生成プロセス

青年男女は婚出する時、家畜、家電製品、雑貨等の財産を両親から分与される。若い牧民たちは、家畜をはじめとするこれらの財を「売って」、その時々生活に必要なものを入手する。自分の財を「売る」ことで、現金を得ることもあれば、物々交換になることもある。親から分与された家畜を売って転用することについては、あらゆる世代の牧民が、「生活のためなら家畜を売ってよい」という。このことは、家畜が商品とみなされていることを示す。モンゴルの家畜は、日本でいう先祖伝来の田畑に比せられるような人格性を帯びた財ではないのである。

銀製品に注目すると、銀製品の移譲は原則として、親族の内部で年長者から年少者に贈与という形でなされる。しかし例外がある。非常時に親族外の者に譲渡されることがある。そのとき銀製品は等価交換の対象となり、交換価値が顕現する。困窮のため父祖伝来の銀製品を手放した男性がいる。この男性の行為に関する、彼の弟の語りを手がかりに家族の内部での銀製品の意味について検討する。

[事例 7]

(アルハンガイ県チョロート郡にて)

DB (24歳、男性) は幼い頃に父を亡くした。それ以来、約10歳の年上の兄TMが、父に代わって家畜その他の財を管理した。兄は飲酒と賭博にのめり込み、家族の家畜を次々と売り払った。父がDBに与えてくれたウマまで勝手に売った。母もTMを止めることができなかった。DBは抗議したが、兄は酒をやめずますます困窮し、ついに父の形見のヘト・ホトカを借金の形に渡した。

DBらの父の形見のヘト・ホトカを所有しているのは同じ地域の牧民である。DBはそれを見るたびに、いつか必ず買い戻そうという決意を新たにす。

彼らの父は、冬期に酒に酔って草原で一人凍死した。その時、子どもたちの中でただ一人10代後半まで成長していた長男TMが、父に代わる「世帯主」となって父の家畜とヘト・ホトカ等の財産を継いだ。次男DBは成長するにつれ、父の財産を長男が浪費していることに対して不満をつのらせた。その象徴がヘト・ホトカであった。DBはそのヘト・ホトカを、父のものであり、父の3人の息子全員のものであると考えていた。DBの認識では、父のヘト・ホトカは家族の集合的な財、いわば家宝である。このため長兄TMには管理権はあるが、処分権はない。一方、TMはこのヘト・ホトカを個人の財産として処分を一人で決定、実行した。この事例では、父の急死により、父の権威による裏付けなくヘト・ホトカが長子に相続された。キョウダイは年齢が離れていても世代的に競合関係にある。このため、キョウダイ内部で葛藤が生じ、家族内での銀製品の意味の交渉が表面化したものである。

古い大型の銀製品は、キョウダイのうち一人だけが相続するため、牧畜地域において稀少な財である。このような銀製品が、骨董品として外国では高値で取り引きされていることは牧民のあいだでよく知られている。このため、次に示すように、古い銀製品の所有者はしばしば価格交渉をもちかけられる。

[事例 8]

(ザブハン県テルメン郡にて)

GB (65歳、男性) は父からもらった「トイク」(*toig* 《ヒツジの膝蓋骨をかたどった銀塊》)⁸を大切にしている。重さは5ラン (*lan*)⁹ (約1.6kg) であるという (写真15)。GBが語った。
「これをととても大切にしている。以前、甥 (傍系子孫) が大型トラックと交換でこれを得たいと言ったが、断った。私はこの銀塊を20万トゥグルク¹⁰ (約2万円) でも売らない。これは孫に贈与する。私には娘しかいないので、娘の息子 (直系男性子孫) に与える。」

この例は次の2つのことを示している。銀製品は、価格交渉にさらされることで、計ることのできない象徴的な価値が付与される。それは、法定通貨を単位として表される交換価値で示される、ということである。そして譲渡の申し出を断ることで、そこで明示された価格を超えた無限の価値が潜在的に生ずる。所有者は価格交渉とその拒絶の物語をその銀製品に塗り込めることで、そのモノの文化的・経済的両面での価値を高めている。

次に銀製品が親族外の者に贈与されたケースを示す。

[事例 9]

(中国出身でロシア国籍を取得したブリヤート系モンゴル女性Jg (30歳、2002年頃) による)

ロシア領内で遊動生活していたブリヤート・モンゴル人の一部は、20世紀初頭、ロシア革命にともなう内戦から逃れ、中国東北部へ移動した。彼らは、その地方を統治していたバルガ・モンゴル人の頭領に、銀装飾の上質な鞍を贈与し「土地を乞うた」。すなわち、彼らがキャンプし、家畜を放牧して採食させるための土地の利用権を申請した。

彼らの願いは受理された。現在も中国東北部のハイラル市近郊にブリヤートの自治区域がある。

この事例が示すのは、贈与物としての銀製品は、家畜や現金で代替できない特別な価値をもつことである。本章をまとめると、日常的には、家畜は商品性を強くみとめられる傾向があるのに対して、銀製品には象徴的な価値が割り当てる。言葉をかえれば、家畜は経済的な価値を、銀製品は文化的な価値あるいは意味を担うといえよう。とはいえ、歴史性を強く帯びた銀製品は価値の交渉にさらされている。交渉の過程で経済価値が上がり、所有者が提示価格を拒絶すると象徴

⁸このような形状の銀塊はインブー(中国語の元宝より)ともよばれ、20世紀初頭までの清朝統治下では貨幣として使われていた。

⁹ランは漢語の「兩」を語源とする近世東アジアの貨幣単位であり、銀一両の内容は、時期や地域により異なる。現在では銀などの重さの単位として用いられており、現代モンゴル語辞書によれば1ラン=37.3gである(小沢 1983)。

¹⁰トゥグルクはモンゴルの貨幣単位である。

的な価値が増すという循環がみられる。ところが、マクロな政治経済変化、自然災害、個人的な困窮といったリスクにさいしては、銀製品は親族外の他者に贈与／譲渡されて生計を支える。つまり生存維持のための資源となるのである。銀製品の価値は重層的に構成されているといえる。

8. おわりにかえて

以上の議論をもとに、銀製品の特徴について経済と文化の2つの側面から、家畜と比べながら考察したい。

第一に、経済的な側面を取り上げる。家畜は使用価値、交換価値に加え、生産手段となる。牧畜経営は技術しだいで大きな利益を生む。家畜には同時に、自然災害ですべてが一挙に「死ぬ」という生き物として不可避の特性がつきまとう。環境の変化に脆弱で、価値の保存手段としてリスクが高いのである。これに対して銀製品は「死なない財」である。ただし、日常的には文化的な価値をもつにとどまる。だが、非常時には経済的な価値を発揮する。このことから、銀製品は、使用価値の高い家畜を手放さずに生存の危機を乗り越えるためのバッファとしての役割を果たしているといえる。つまり、モンゴル牧畜社会においては、銀製品と家畜とは財として相補的な関係にあるのである。

第二に、銀製品の文化的な意味について、とくに女性の銀製品に注目して述べたい。まず男性の銀製品は、理念としては末子相続に従い、父系単系相続される。男性の銀製装身具は家族の連続とその支配の理念を象徴するといえる。女性の場合は、原則としてすべての娘が母の銀製品を分割相続する。母から複数の娘たちに銀製品が継承されることで、母系の家族に関する記憶や歴史は拡大再生産される。すなわち、女性の銀製品は象徴的な豊かさを生成し、拡散させるものであるといえる。女性の小さな銀製品は経済的な価値が低い。しかし、母系の家族の繁栄という究極の豊かさを生み出す源泉という意味で、高い「フルング」性を有するのではないだろうか。

銀製品は、リスクにさいして生存を支える機能をもつ一方で、日常においては象徴的な豊かさを生みだし育てるものなのである。

参考文献

- 青木富太郎. 1961. 「家庭内における蒙古婦人の地位-主として明代」『歴史教育』3(8): 26-31.
- 青木富太郎. 1955. 「古代蒙古の末子相続制」『内陸アジアの研究』ユーラシア学会(編), 167-216ページ所収.
- BARTH, Fredrik, 1964. "Capital, Investment and the social structure of a Pastoral Nomad Group in South Persia", in Raymond and YAMEY, B. S. (eds.), *Capital, Saving and Credit in Peasant Societies*, Chapter 4, London: George Allen & Unwin, 69-81, bibliography.
- DORJGOTOV, A., SONGINO, Ch, 1998. "Zuragt Tol", Ulaanbaatar: 'Ongot khevlel KhKhK.
- 後藤富男. 1968. 『内陸アジア遊牧民社会の研究』東京: 吉川弘文堂.
- 後藤富男. 1970. 『騎馬遊牧民』東京: 近藤出版社.
- 上村明. 2006. 「ポスト社会主義モンゴル国における牧畜経営-開発モデルと遊牧の実践-」『研究彙

- 報』(特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築-象徴系と生態系の連関をととして-」“自然資源の認知と加工” 研究班報告) 14 : 11-18.
- 風戸真理. 2006. 「商品世界からこぼれ出る家畜-社会主義期および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性と意味-」『人文學報』 93 : 25-55.
- 風戸真理. 2008. 「モンゴル国における土地私有化政策とローカルな実践-冬用キャンプ地の価値と権利をめぐる」『エコソフィア』 20 : 81-96.
- 風戸真理. 2009. 『現代モンゴル遊牧民の民族誌』 京都 : 世界思想社.
- 小沢重雄. 1983. 『現代モンゴル語辞典 (第1版)』 東京 : 大学書林.
- 佐藤俊. 1991. 「ラクダ移譲の制度的側面-ケニア北部のレンディーレ社会の事例」『ヒトの自然誌』
- 田中二郎・掛谷誠 (編), 東京 : 平凡社. 271-292 ページ所収.
- 杉山正明. 1997[2003]. 『遊牧民から見た世界史』 東京 : 日本経済新聞社.



写真1 子どもの髪を切る儀礼



写真2 茶碗。木製で底と内側を銀で覆われている



写真3 鞍と頭絡。シラカバ製の鞍と牛革製の頭絡が銀で装飾されている



写真4 女性の腕輪と指輪。両方とも現代のデザインで、腕輪には模造の珊瑚とトルコ石が留めつけられている。指輪の意匠は、女性用の結婚指輪として人気がある



写真5 両手の指にはめられた指輪は、留めつけられた珊瑚とともにすり減っている。指輪をつけた手で家畜の怪我を治療する



写真6 母譲りのダラルトで三つ編み髪を後頭部に留めたOs



写真7 ヘト・ホトカと嗅ぎタバコ入れ（中央）と火打ち石（下）



写真8 銀製の装飾と付属品のついたタバコ袋。キセルを掃除する棒（左上）と燃え滓の受け皿



写真9 新年に正装した未婚男性たち。襟元には銀のボタンが並び、中央の青年の帯にはヘト・ホトカとキセルがさがっている



写真10 騎乗に必要な装備4点、すなわち頭絡、はみ、鞍、鞭のついた棒を着装したウマ。厳冬の雪原にて



写真11 再形成されたばかりの銀の指輪と金（18k程度）のピアス。後ろは、再形成の対価としてダルハンに支払われた分量の乳製品



写真12 銀のテープで縁が飾られ、乗用部分に銀のモチーフがついた鞍



写真13 BKの注文で作られた真新しいボタンと指輪



写真14 BKのゲルの一角を作業場として仕事をするダルハン。中央奥はBKの娘



写真15 GBのトイク（インプー）。中央奥に「徳」などの漢字の刻印が見える